中京大学
広報誌

真剣味

192号
2018年5月18日発行

巻頭特集

スポーツ&語学で、グローバルに活動

●国際系学部学生の活躍　●JICAボランティア（ソフトボール部、柔道部）

主な内容

●2018年度入学式　●新体育館竣工（豊田キャンパス）　●2017年度卒業式　●平昌五輪・スポーツ関連
●学生、教員の受賞・産学連携事業　●地域貢献・連携事業　●スポーツ応援グッズ販売　●附属高校News　ほか

※表記について：掲載された方の肩書き、学年は全て行事の行われた時のものです。

挑戦する大学　中京大学 CHUKYO UNIVERSITY

〈発行〉中京大学 広報課
〒466-8666名古屋市昭和区八事本町101-2　TEL.052-835-7111㈹

English Speaking Ability

英語力を使って挑戦

1 個人部門で第2位

第6回 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト
国際英語学部 西井さん「インプレッシブ賞」

国際英語学部国際英語キャリア専攻4年の西井勇希さんが、昨年12月東京で開催された「第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（神田外語グループ・読売新聞社主催）個人の部で、インプレッシブ賞を獲得した。エントリー総数は641人。インプレッシブ賞は第2位にあたる。

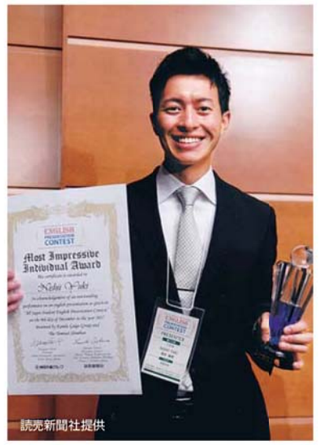
西井さんは、「ハイパーシェアエコノミー・プラットフォーム」を作るITサービスを取り上げた。大量廃棄されていくモノを価値のあるモノに変換することと職人の能力開発を可能にするITプラットフォームのサービスについての提案である。

「大学で過ごした時間と努力に自信が持てました。またそれが全国の舞台でも通じることが証明できました。大会ではさらに高いレベルに触れ、今後の成長につながるヒントにもなりました」と西井さん。今年、海外のデザインタイルを主に扱う専門商社・リビエラ株式会社に就職し、これまで培ってきた経験を仕事の場で生かしていく。「卒業後は建築やデザインといった新しい分野にかかわります。これまで学んできた英語力を生かしつつ、これまでと全く違うことを学べる環境で頑張りたい」と意欲を見せた。

読売新聞社提供

読売新聞社提供

読売新聞社提供


読売新聞社提供

2 全国6人の枠に選出

四大陸フィギュアスケート選手権
国際英語学部 伊藤さん 通訳ボランティア

国際英語学部国際学専攻3年の伊藤美月さんは、1月20～29日に台湾・台北アリーナで開催された「2018 ISU四大陸フィギュアスケート選手権」で通訳の国際ボランティアに参加した。

伊藤さんは昨年、名古屋で開かれたロボカップ世界大会の企業ブースで通訳ボランティアを行った経験があるが、海外では初めて。今回は日本国内の大学生・専門学生を対象とした募集（採用枠6名）に応募し、選出された。

台湾のボランティアとチームを組み、大会関係者の受付や誘導、選手へのインタビューや翻訳など業務は多岐にわたり、伊藤さんはホテルの受付を担当した。雪で飛行機が飛ばずホテルまで辿りつけない人の対応など想定外のことも含めていい経験になったという。

「不慮の事態に対応できたのはもちろんですが、全国から集まった6人と、台湾のボランティア学生と仲良くなれたことが特にうれしいです」と笑みをこぼした。

3 チームワーク

第11回 ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト
国際英語学部 山口さん・一見さん 優勝

山口さん（左）と一見さん

都外国語大学で昨年12月に開催された「第11回ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト―地域から発信する日本文化―」で、国際英語学部国際英語キャリア専攻3年の山口いづみさん、一見（いちみ）とも子さんペアが1位（森田杯）を手にした。

同コンテストでは日本文化をテーマに、二人一組でプレゼンテーションを行う。文字無しで写真のみをスライドで提示し、ペアで掛け合いをしながら発表を進めるユニークな方式だ。

山口さん・一見さんペアは「さ・し・す・せ・そ」をテーマに発表。「さ・し・す・せ・そ」とは調味料を表す頭文字（さ＝砂糖、し＝塩、す＝酢、せ＝醤油、そ＝味噌）で、岡崎の八丁味噌を主に味噌全般を取り上げた。「商品紹介のような発表にしたくなかった」と山口さん。味噌を通して、文化を知る大切さ、伝統を守る重要さを考えさせられる発表を目指したという。

審査で重要視されたのは「チームワーク」。ペアであることの利点を生かした発表が求められた。「どちらかが発表中につまってしまった際は自然な流れで助け舟を出せるなどチームワークを発揮できたと思います」と一見さんは話す。山口さんは「L・S・Wing（※）で先生やほかの学生と話したり、日常的に二人での会話を英語にしたりしていたので、自然な会話ができたことが功を奏したと思います」と振り返った。

※L.S.Wing=ラーニング・サポート・ウィング
国際英語学部専用のフロアで、このフロアでの会話は英語のみが基本。

開発途上国支援のため、JICA（※）との連携事業で行うボランティアとして、ソフトボール部女子18人がアフリカ・ボツワナ共和国へ、柔道部3人が南米・アルゼンチン共和国へ、2月から約1か月間派遣された。JICAがアフリカにおいてスポーツ分野で大学と連携し学生を派遣するのは初めて。この事業は3年間継続される。

（※）JICA＝独立行政法人国際協力機構：日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行っている。

1

5都市で指導

ソフトボール部女子 ボツワナ共和国へ

ソフトボール部女子は派遣されたボツワナで、ソフトボール教室やナショナルチームとの親善試合、コーチミーティングなどで5都市を回り、約680人を指導した。同国でソフトボールは野球よりも競技人口が多い「国技」だという。活動は現地の各メディアでも取り上げられ、親善試合にはボツワナ在住の日本人も応援に駆け付けた。

二瓶雄樹部長・監督（スポーツ科学部准教授）は帰国後、「『百聞は一見に如かず』だと感じました。聞いていた話と行ってからの感じ方で異なる部分が多かった」と話す。主将の高山美蓉子さん（経営3年）、阿部瑚那美さん（スポーツ科3年）も「行く前は食事や治安などマイナスイメージが拭えなかったが、現地の方はとてもあたたかく、イメージが変わりました。自分の先入観を一掃でき、世界というハードルが低くなった」「国際交流と聞くと、英語力や専門的な技術が必要だと思い込んでいましたが、自分たちの分野でも貢献することができた」と派遣されたことで考え方が変わったという。高山さんは「日本人の規律を守り、思いやりを持つという良いところをあらためて発見できました。全員が同じ目標を持って頑張れる、日本一になれるチーム作りに生かしたい」と思いを語った。

2

指導者を目指す

柔道部 アルゼンチン共和国へ

柔道部の三宅恵介部長・監督（スポーツ科学部講師）と部員、寺内大貴さん、松岡将平さん、森彩華さん（いずれもスポーツ科4年）は、南米アルゼンチンにある「在亜沖縄県人連合会」を拠点として技術指導や講義を行い、リオ五輪で女子48kg級金メダリストのパウラ・パレト選手が所属するアルゼンチン・ナショナルチームなどで汗を流した。

現地は、子どもからお年寄りまで幅広い年齢の柔道家が道場で稽古するなど、愛好家が多いことで知られている。現役の選手のみならず、世界マスターズ選手権の金メダリストも輩出している。

三宅部長は帰国後、「学生たちが指導している様子を見ていると、自分自身がイメージしている技術を人に伝えるのに苦労していた。派遣された学生は将来指導者を目指しており、この経験を生かし、わかりやすく伝える力を少しでも身につけることができたら」と話した。派遣された学生3人は、今年3月に卒業しており、それぞれ警察官、教員として社会人生活を始めている。

附属中京高校　NEWS

附属中京高校サッカー部 本山 遊大選手 ヴィアティン三重に入団

記者会見で抱負を語る

中京大学附属中京高校サッカー部本山遊大選手の日本フットボールリーグ（JFL）所属ヴィアティン三重への入団記者会見が2月14日、同校で行われ、ヴィアティン三重の海津英志監督らが出席した。

本山選手は主将を務め、前年度に行われた第96回全国高校サッカー選手権大会に出場している。「今後は、さらに高い技術を身につけて、チームとともにJリーグに上がり、JリーガーとしてJリーグに上がり、Jリーガーとして活躍したいです」と話した。

海津監督は「本山選手の持ち味である運動量と気迫をどんどん出して、勝利に導いてくれる、大きな戦力として期待しています」と語った。

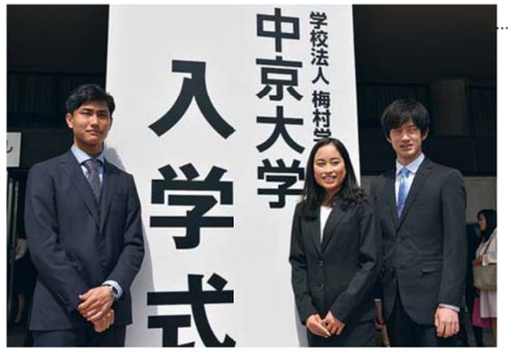
2018年度 入学式

3008人が学生生活をスタート

2018年度中京大学入学式が4月1日、名古屋市の日本ガイシホールで行われ、学部生2948人、大学院生60人の合計3008人が期待と希望を胸に新しいスタートを切った。

新入生を代表して文学部の小澤唯さんは「今日からこの伝統ある中京大学の学生としての第一歩を踏み出します。強い意志を持って、自分の夢を追いかけ続けていこうと思います」と宣誓した。

新入生代表の小澤さん



（左から）吉永さん、須崎さん、山本さん

安村学長

「入学式のことをマトリキュレーション・セレモニーと言います。〈一員となる〉という意味です。今日から皆さんは中京大学のメンバーになるということです。大学では、さまざまなことを自分で選び、決める場が随所にあります。自由ということでしょうが、それは、その結果についても責任を負うということです。自立した人間、自分を律するもう一つの自律した人間となるべく努めてください」と安村仁志学長は式辞の冒頭英語であいさつした。

また、梅村清英総長・理事長は祝辞で「皆さんは全国各地から中京大学に集い、大学での学びを中心にした新たな生活が始まります。皆さんの出身地域はさまざまです。それぞれの興味や関心も違うでしょう。多くの仲間と出会い、勉学や部活動などを通じて学び合い、刺激し合い、自分を磨いてください。そして個性を伸ばしてください」と呼びかけた。

梅村総長・理事長

式典終了後は、スポーツ科学部に入学したショートトラックスピードスケートの吉永一貴さん、フィギュアスケートの須崎海羽さん、山本草太さんが新聞、テレビの取材に応じた。今後について、吉永さんは「大学では、自分の競技に繋がることを勉強したい。4年後の北京五輪で活躍してショートトラックという競技をもっと多くの人に知ってもらいたい」と話した。

須崎さんは「これからは、できるだけ自分で決断して行動していきたい。フィギュアスケートでは、世界の選手たちに少しでも近づくことを目標にして頑張りたい」と意欲をみせ、また、山本さんは「大学生になって気持ちを新たにして、周りの選手から刺激をもらいながら、自分も頑張っていきたい」と大学生活の意気込みを語った。

豊田キャンパス 新体育館竣工

来夏にはスポーツ・ミュージアムオープン

待望の新体育館（3号館）が豊田キャンパスに完成した。竣工式は2月28日、梅村清英総長・理事長、安村仁志学長をはじめ学園関係者らが出席して行われた。3月からはアリーナを中心に使用され始め、各クラブの練習や他大学とのオープン戦などで利用した選手たちからも「明るくて使い勝手が良い」と上々の評判だ。

また、大学の大切な役割の一つである地域貢献活動に対しても真新しい体育館は役目を果たしつつある。

春休み中には、バレーボール部男子が、愛知県立旭丘高校バレーボール部に対して指導を行った。青山繁監督は「監督さんからの依頼でやりましたが、地域貢献ということはもちろん、高校生たちに教えることでうちの選手たちの勉強にもなります」と話す。

宮本徹・旭丘高監督は「受け入れていただき感謝しています。選手もとても集中して取り組んでいた。機会があればまたよろしくお願いします」とうれしそうだった。

なお、2019年夏には館内2階にスポーツ・ミュージアムがオープンする。

青山監督の指導を受ける旭丘高校バレーボール部員

3085人が新たな門出

2017年度 卒業式

中京大学の2017年度卒業式が3月19日、名古屋市の日本ガイシホールで行われ、学部生2997人、大学院生88人の合計3085人が学位を授与され新たな門出を迎えた。

式典では、大学院と学部の各代表へ学位記と卒業証書が安村仁志学長から授与された。学業や課外活動などで優秀な成績を修めた卒業生には学長賞や同窓会賞、創立者賞などが贈られた。

安村仁志学長は「明日から皆さんの本学での学びは過去に位置づけられますが、それはこれからの長い人生に生かす糧になります。自分のためだけではなく共に生きている人たち、これから生まれてくる人たちのため、社会・世界をより良くすることにつながる力にしてください」。

梅村清英総長・理事長は、「本学は〝自ら考え、行動することのできるしなやかな知識人〟の育成を教育目標にしています。〝しなやか〟とは、何事にもくじけない、柔軟で強い、という意味を込めています。皆さんはすでに、そうした資質を十分に備えています。社会生活を送っていく中で、本学を卒業したことに自信を持ち、それを誇りとしてください」とそれぞれお祝いの言葉を述べた。

卒業生を代表して現代社会学部の今竹文香さんは「入学当初、決まった教室も机もなく講義スタイルもさまざまで、戸惑ったことを覚えています。所属する現代社会学部で、メディア系の講義や教育論、文化人類学など、さまざまな講義を受け、たくさんの知識を吸収した4年間でした」と謝辞を述べた。

式典終了後も会場周辺では、学友や恩師と記念撮影をしたり、思い出話に花を咲かせたりしている姿があちらこちらでみられた。

PyeongChang 2018

フィギュア・宇野 昌磨選手 銀メダル
パブリックビューイングで応援

パブリックビューイングで宇野選手の銀メダル獲得を祝う関係者、豊田市民

平昌冬季五輪が2月に開かれ、中京大学勢はフィギュアスケート、アルペンスキー回転、フリースタイルスキーモーグルの各種目に計5選手が出場した。

世界中が注目する中で行われたフィギュアスケートでは、宇野昌磨選手（スポーツ科2年）がショートプログラム（SP）3位につけ、フリースケーティング（FS）は最終滑走で臨んだ。最初のジャンプで転倒したものの、その後は完璧な演技で見事銀メダルに輝いた。この模様は、豊田市で開かれたパブリックビューイング（本学、豊田市、トヨタ自動車共催）で流され、本学教職員、学生たちが豊田市民とともにバルーンスティックを手に声援を送った。

堀島選手

宇野選手

また宇野選手は、ペアの須崎海羽選手（附属中京高3年）・木原龍一選手（'14年度スポーツ科卒）らとともにフィギュア団体戦にも出場し、5位に入賞した。須崎・木原選手組はペアでも上位を目指したが、SPで自己ベストをマークしたものの、上位16位に入れず、FSに進めなかった。

スキー競技では、モーグルの堀島行真選手（スポーツ科2年）が予選を余裕を持って通過したが、20選手が臨んだ2本目で転倒し、惜しくも11位に終わった。パブリックビューイングが行われていた豊田市の会場はこの瞬間、「あーっ」というどよめきに包まれた。

また、アルペン回転種目で3度目の五輪に臨んだ湯浅直樹選手（'17年度体育学研究科修了）は2回目の序盤にバランスを崩して無念の途中棄権となり、トリノ五輪7位以来の入賞はならなかった。

Pro-Boxing

フライ級王座への前哨戦
田中 恒成選手圧勝で飾る

経済学部在学の世界ボクシング機構（WBO）世界フライ級1位の田中恒成選手（4年）が3月31日、名古屋市の名古屋国際会議場イベントホールで、同級13位のロニー・バルドナド選手（フィリピン）と対戦し、フライ級としての初戦を9回2分26秒TKO勝ちした。バルドナド選手は11戦10勝1分けの戦績を誇る強打者だが、試合は田中選手の一方的な勝利だった。戦績はこれで11戦11勝（7KO）。

田中選手は昨年9月、大阪市でのWBOライトフライ級タイトルマッチで2度目の防衛に成功したが、両眼を負傷し、王座を返上。1階級上げて、再起戦ともいえる一戦となった。試合は立ち上がりから田中選手が正確なパンチで相手を圧倒。9回、連打で相手を追い込んだところでレフェリーが試合を止めた。

田中選手は今後、ミニマム級、ライトフライ級に続いて、3階級制覇となるフライ級でも世界チャンピオンを目指す。

各種受賞

●工学部 橋本研究室の篠原さん・城さん、青木研究室の大野さん
「DIA 2018」研究奨励賞を受賞

「動的画像処理実利用化ワークショップ2018（DIA2018）」が3月8日、9日、名古屋キャンパスで行われ、橋本研究室（橋本学教授・機械システム工学科）の篠原伸之さん（工学研究科1年）、城亮輔さん（工学部3年）、青木研究室（青木公也教授・機械システム工学科）の大野光津弘さん（同4年）が研究奨励賞を受賞した。DIAワークショップは、マシンビジョン、コンピュータビジョン分野における画像処理の実利用に関わる研究・開発の発表、討議、情報交換の場として、毎年日本各地で開催されている。

（左から）城さん、大野さん、篠原さん

●工学部 野浪研究室の松原さん、澤田さん
研究発表した各学会で受賞

工学部野浪研究室（野浪亨教授・機械システム工学科）の松原綜一郎さん（工学研究科2年）と澤田亮司さん（工学部3年）が相次いで賞を受賞した。

松原さんは3月5日、日本材料学会東海支部主催の第12回学術講演会の口頭発表で、学術分野の優秀講演賞を受賞。発表論文は「竹炭を塗布した不織布の水溶液中でのセシウム・ストロンチウム吸着評価」で、野浪研究室が企業と共同研究している竹炭のセシウム・ストロンチウムの吸着実験について、初めて学術的な発表を行った。

澤田さんは、3月2日に開催された日本熱処理法技術協会の第8回中部支部主催講演会で研究発表優秀賞を受賞した。発表内容は「擬似体液中でヒドロキシアパタイトを被覆した陽極酸化処理したチタン板のメチレンブルー脱色能及びタンパク質吸着能」。チタン板の生態親和性を高めるためにアパタイトの吸着力と酸化チタンの分解能力を利用した研究を発表した。

松原さん（左）、澤田さん

●経済学部
「トランスコスモス論文コンテスト」で優秀賞・奨励賞

「トランスコスモス論文コンテスト」の最終プレゼンテーションがトランスコスモス本社で2月3日に行われ、経済学部・中山ゼミ（中山惠子教授）の猪塚丈治さん・西嶋光さん（3年）、日比野志帆さん・山下奈々花さん・山田早織さん（2年）、二瓶怜さん・中村研斗さん（2年）の3組が発表した。

最終プレゼンテーションを行なった7組のうち、猪塚さん・西嶋さんの組は、具体性のある研究をしたことが審査員に評価され、優秀賞を受賞。また、日比野さん・山下さん・山田さん、二瓶さん・中村さんの発表も評価され、奨励賞が授与された。

●総合政策学部 今井ゼミ
「あいち学生観光まちづくりアワード」で提案

総合政策学部・今井ゼミ（今井良幸准教授）のゼミ生は、3月13日に愛知大学で行われた「あいち学生観光まちづくりアワード」に出場した。応募総数59件の中から最終7組に残った今井ゼミは、「リアル人生ゲームin豊橋」をテーマに発表。内容は家庭用ボードゲームの定番である「人生ゲーム」にヒントを得て、豊橋市内を走る路面電車を利用し実施するもの。地域資源を生かして人を呼び込むことを目的とした提案を行い、敢闘賞を受賞した。

産学連携

●総合政策学部 坂田ゼミ
中日ドラゴンズ、附属中京高校による産高大連携講義を開催

昨年11月にスタートした、株式会社中日ドラゴンズ、中京大学附属中京高校、総合政策学部・坂田ゼミ（坂田隆文教授）の3者で進める産高大連携講義の最終提案発表会が3月16日、附属高校で行われた。この取り組みは、中日ドラゴンズの協力のもと、附属高校の生徒と坂田ゼミの学生が4回にわたる講義とグループワークを通じて、新商品の企画・立案を行うもの。当日の提案発表会では、附属高生と坂田ゼミ生の受講生23人が5チームに分かれ、中日ドラゴンズ球団職員に、ドアラを活用した新たな商品提案を行った。球団職員の方からは、「社内からは出ないアイデア」、「本当にこれなら商品化したいと思えた」など好評価を得た一方、価格設定の甘さ、説得力を高めるための調査不足などの指摘も受けた。

●総合政策学部 宮川研究メンバーの学生
豊田市と連携し「ツーリズムマップ」を企画・制作

総合政策学部宮川正裕教授の指導するプロジェクト研究メンバーが、豊田市と連携して制作に取り組んだ「とよたツーリズムマップ」が完成し、3月26日、豊田市役所で報告会が行われた。太田稔彦豊田市長に報告を行ったのは、総合政策学部3年の北原唯菜さん、藤井遙さん、竹内敦さん、谷川信啓さん、岩川優矢さんと、指導に当たった宮川教授。同市が進める大学連携事業の一環「大学・高専からの研究提案」として、市内の大学・高等専門学校に向け募集が行われ、同プロジェクトの提案が採用された。

課題テーマ「とよたの新たな魅力を創出するプロモーション」に対し、メンバーは観光マップを考案。〝SNS映え〟する場所を自分たちで見つけ、見る人に「そこに行ってみたい」と思ってもらえる魅力あるマップを作成した。

●経営学部 中村ゼミ
新聞販売店を活用した再配達代行システム「よるくる」をヤマト運輸に提案

経営学部・中村ゼミ（中村雅章教授）は1月16日、新聞販売店を活用した再配達代行システム「よるくる」の事業化の可能性をヤマト運輸に提案した。「よるくる」は、昨年9月に最終発表会が行われた新聞販売店の新規事業を考案するプロジェクトで、第1位となった提案である。発表には、ヤマト運輸のほか、新聞販売店の方なども参加し、「（提案の）着眼点が良かった」「発表が工夫されており、わかりやすかった」などの評価を受けた。その一方で、「荷物の管理をどうするのか」など、実現に向けての課題も明らかになった。

科学技術の普及啓発

工学部・磯 直行教授
文部科学大臣表彰「科学技術賞」を受賞

工学部の磯直行教授（電気電子工学科）が文部科学大臣表彰「科学技術賞」（理解増進部門）を受賞した。業績名は「宇宙飛行士との交信体験による子供向け無線科学の理解増進」。

文部科学省は、科学技術に関する研究開発や理解増進などにおいて顕著な成果を収めたチームや人を「科学技術分野の文部科学大臣表彰」として顕彰している。理解増進部門は、幅広く科学技術に関する関心や理解の増進等に寄与し、科学技術に関する知識の普及啓発等に寄与する活動を行ったチームや人が対象。

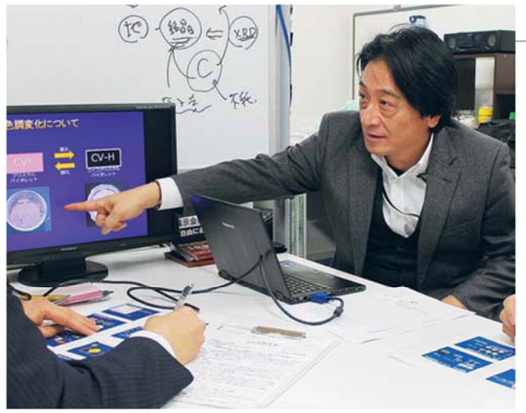
磯教授のチームはNASAとの共同プロジェクトを東海地方で計12回企画。国際宇宙ステーション（ISS）に滞在する宇宙飛行士との無線交信体験（ARISSスクールコンタクト）を行い、約200人の小中学生が成功。また、電子工作教室やサイエンスカフェを実施し、5500人を超える小中学生が参加した。

磯教授は2013年の総務省表彰に続いての受賞。「受賞したことは大変うれしいですが、地域の学生ボランティアやアマチュア無線連盟など多くの方の協力がなければ成り立ちませんでした。携わった皆さんの代表として受け取ったという思いです」と感謝を述べた。

4月17日、文部科学省にて表彰式が行われた。

光触媒の複合化

工学部・野浪 亨教授の研究チーム
2つの機能を持つ新規材料を開発

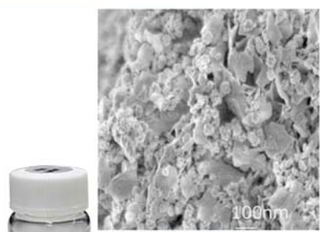


工学部野浪亨教授の研究チームは、光触媒活性を向上させる光触媒（*1）とアパタイトの複合化方法を開発した。

酸化チタン光触媒は、紫外線で空気中の水分と酸素から活性酸素を作り、これが有機物・汚れ・臭いを分解する作用があるため、塗料などの建築材料、化粧品やデオドランド剤など、産業的に用いられている。しかし、従来の酸化チタン光触媒は、強い紫外線の当たる屋外などでしか、その機能が発揮できないことが難点だった。

今回の研究では、吸着能のある球状多孔質アパタイト（マリモアパタイト：商標登録申請中）に分解能のある酸化チタン光触媒を担持（*2）した複合材料を合成することによって、「蛍光灯程度の弱い紫外線強度でも光触媒活性を示すこと」「光照射を停止しても光触媒反応が持続すること」を確認。吸着能と分解能の2つの機能を持つ新規材料を開発した。

今後の実用化に向け、野浪教授は次のように話す。「酸化チタンを担持した球状多孔質アパタイトは弱い紫外線下でも使用できる。可視光反応型光触媒との複合化の可能性があるほか、生体になじみが良く無害なため食品添加物や薬品、化粧品としても応用できる。さらに、光触媒だけでなく、芳香剤や薬品材料など、さまざまな物質との複合化が可能。多分野での商品化が期待でき、企業と共同し商品開発をしていきたい」。幅広い分野への応用が期待される。



電子顕微鏡で見たマリモアパタイト

※1:光を照射することにより化学反応を促進する物質の総称
※2:粉末状の触媒を担体に固定すること

機能性食品とトレーニング

国際教養学部・渡邊 航平准教授
SIP 次世代農林水産業創造技術シンポジウムで研究成果を発表

国際教養学部の渡邊航平准教授は、昨年11月に開催されたSIP（※）次世代農林水産業創造技術「次世代機能性農林水産物・食品の開発」に関するシンポジウムで「機能性食品と運動トレーニングの併用が高齢者の神経筋機能に及ぼす影響」と題して研究成果を発表した。

渡邊准教授の研究グループは、人を対象に、中枢神経の働きを評価する研究手法を応用し、機能性食品と運動トレーニングの併用が高齢者の中枢神経を含めた身体機能におよぼす影響を明らかにすることを目的とした研究を進めている。

今回の発表では、高齢者の男女50人を対象に6週間の実験を実施し、筋力トレーニングと食事（魚肉タンパク）が運動機能や運動神経の働きに及ぼす影響について研究し、併用によって筋力トレーニングのみに比べて明らかな変化を生じさせたことなどを述べた。

※戦略的イノベーション創造プログラム：産学官連携により基礎研究から実用化までを見据え、研究開発や制度改革を推進する国家プロジェクト

近代会計史

総合政策学部・中村 将人准教授
「日本会計史学会研究奨励賞」を受賞

昨年11月4日、総合政策学部・中村将人准教授が会計史研究論文「近代期日本の国有鉄道における固定資産会計―「補充費」を中心として―」で「日本会計史学会研究奨励賞」を受賞した。

論文は2016年9月に北海学園大学で行われた日本会計史学会第35回大会の自由論題報告で発表された後、学会誌「会計史学会年報」第35号に掲載されたもの。同誌に投稿した若手研究者の中から選ばれた。大会は年1度開催しており、当該年度は「会計史研究からの現代会計への提案」がテーマだった。

受賞した中村准教授は「本稿は近代期日本の国有鉄道において固定資産維持がどのように行われていたかを明らかにしたもので、今日一般的である減価償却とは異なり、公企業の性格に適した特殊な手法によっていたことが判明した。今後ともなお一層の研鑽を積み、さらなる研究成果につなげたい」と話した。

ENQUÊTE

アンケートにご協力ください

今後の広報誌改善のため、アンケートにご協力お願いいたします。

下記QRコードから読み取りのうえ、お答えください。

なお、回答していただいたことについては広報誌改善以外には使用いたしません。

期間限定 **スポーツ応援グッズ 販売開始**

中京大学は「スポーツ応援グッズ」の販売を行う。期間は5月1日から6月29日まで。

取扱商品はTシャツ、ポロシャツ、パーカー、スウェットパンツ、スウェットシャツの5種類。

中京大学公式ホームページのリンクからミズノ㈱のウェブサイトを通じて注文を受け付ける。商品発送は注文後3週間から1カ月程度を予定している。

なお、購入に際しては右記の学校ID、学校パスワードが必要となる。

学校ID……G2300001
学校パスワード…nmd4n3bk
（ID、パスワードともに全て半角英数です）

地域貢献

名古屋市立大学と包括連携協定を締結　地域社会への貢献目指す

中京大学と名古屋市立大学は1月16日、地域社会の一層の発展に資することを主な目的に、包括連携協定を締結した。本学名古屋キャンパスで行われた締結式には、安村仁志・中京大学学長、郡健二郎・名古屋市立大学学長ほか、両大学から関係者27人が出席した。

協定締結の狙いは、教育、研究、社会貢献などに関して連携を推進し、学術および産業の発展、人材の育成に寄与すること。本学のスポーツ科学の知見と名古屋市立大学の医学的知見を活用して積極的に地域に還元していくことなどを目指す。

郡学長は、「大学は少子化による生き残りレースに入っていますが、切磋琢磨、あるいは協力しながらウインウインの関係にしていきたい」とあいさつ。安村学長も「協定は本当に力強い。一つの大学ではできないことも二つの大学が共同すればできるのではないか。夢のあることをどんどんやっていきたい」と応えた。

午後からは協定を記念したシンポジウムが清明ホールで開かれ、フィギュアスケーターの小塚崇彦さん（15年度体育学研究科修士課程修了）の講演が行われた。小塚さんは、自らのスケート人生を振り返るとともに、「フィギュアスケートを見るスポーツからやるスポーツとして普及させていきたい」と抱負を語った。

続いて「運動していますか？　健康なからだづくり」と題したパネルディスカッションが行われ、高橋繁浩・スポーツ科学部長をコーディネーターに、清水卓也・スポーツ科学部教授、和田郁雄・名市大大学院医学研究科教授、奥津光晴・名市大大学院システム自然科学研究科講師がパネリストを務めた。

安村学長（左）と郡学長

小塚さん

スポーツ科学部

髙橋 繁浩教授 「しがスポーツ大使」に就任

スポーツ科学部長で体育会水泳部部長・監督の髙橋繁浩教授（滋賀県草津市出身）が昨年11月、「しがスポーツ大使」に就任した。

「しがスポーツ大使」は、滋賀ゆかりのトップアスリートやスポーツチームに、同県のスポーツ振興と地域活性化の一翼を担ってもらうのが目的。髙橋教授はオリンピック出場の経歴、大学水泳部監督としての指導、またマスターズ水泳にも力を注いでいることから選ばれた。

髙橋教授は「スポーツ大使に就任させていただいたことを光栄に思います。子どもの体力向上はもちろん、年配の方々がいかに健康に長生きできるか、スポーツができることはたくさんあると思うので、スポーツ振興に貢献できるよう頑張ります」と意気込みを語った。

髙橋教授（右）と滋賀県の冨永重紀局長

地域連携

安村学長（左）と近藤理事長

西尾信用金庫と地域経済の発展に関わる協定を締結

中京大学と西尾信用金庫は昨年12月26日、産学連携の推進、学術研究の振興、および地域経済の発展に資することを目的に連携協力協定を結んだ。本学が信用金庫と協定を結ぶのは初めて。今後は、研究会を定期的に開き、同信用金庫職員、教職員、学生の力を合わせて「地方創生」に関わる課題を抽出し、その解決を模索していく。

締結式には、安村仁志学長、西尾信用金庫・近藤実理事長など、双方の関係者が出席した。

協定締結について、近藤理事長は「大学の知見を借り、経済分析を通じた地域貢献の道筋を見つけていきたい。人と人との連携、学生と関わることで、新しい感覚の、新しい知恵が得られると期待しています」と述べた。また安村学長は「本学の長期戦略NEXT10の一つに社会連携があります。地域企業や行政機関等と産学連携を通じて積極的に関わり、お互いの知見をさらに高めていくことができればうれしい」と話した。

奨学金事業

公益財団法人トランスコスモス財団と協定を締結

安村学長（左）と平井副理事長

中京大学と公益財団法人トランスコスモス財団は昨年10月24日、奨学金給付事業に関する協定と覚書を締結した。締結式は本学名古屋キャンパスで行われ、安村仁志学長、トランスコスモス財団の平井孝始（たかし）副理事長はじめ、双方の関係者が出席し協定書を取り交わした。

この協定は同財団と本学の連携のもと、社会のさらなる発展向上に資することの一環として、大学生への奨学金給付事業を通じて優秀な人材の育成支援を図り、社会貢献を果たすことを目的としている。

経済学部の学生を対象に支給され、今年度は中山ゼミに所属する3人が選ばれた。本年度以降も学内選考を経て候補者をトランスコスモス財団に推薦し、財団選考委員会における選考を経て、同財団理事会が決定する。

2017年度 FDシンポジウム「アクティブラーニングとは何か」

中京大学教育推進センターは、1月22日、名古屋キャンパス清明ホールで2017年度FDシンポジウムを開催した。今回のテーマは「アクティブラーニングとは何か」で、基調講演や学生による事例報告が行われ、学内外の100人余りが聴講した。

基調講演では、愛媛大学の中井俊樹教授が講師を務め、アクティブラーニングの定義から課題、授業における学生の意見などを例にあげ、教員には実践方法などの話題を提供した。

事例報告には工学研究科、経営学部の学生と教員が登壇。橋本研究室（橋本学教授）の田口皓一さん（工学研究科1年）は、「学部や大学院での経験を通じて、自己意識と価値観が大きく変わった。社会に出る前にさらに経験を積み、一つでも多くのことを学びたい」と話した。橋本教授は「学生個人の特性に合わせて個々に『ちょっと上』の課題を与え、クリアすることで自信となる。達成感を振り返る機会を作りさまざまな学びを得てほしい」と解説した。

経営学部は中村ゼミ（中村雅章教授）の伊藤あやのさん（3年）、谷川咲月（がっとう）さん（3年）、月東瞳さん（2年）が、自らが携わった商品開発プロジェクトやビジネス提案を紹介。中村教授は「授業で知識を得るだけでなく使えるレベルに持っていくこと。また計画性、やり抜く力などを養ってもらいたい」と話した。

自己啓発